共鳴

野間清治顕彰会会長　森　壽作

野間清治が亡くなって今年で六五年になる。音羽に聳える講談社の新本社ビルから眺める都会の景色は一見に値するが、旧館の貴賓室にはかなわない。どっしりとした木調の調度品はそこにいる者に静かに歴史を語りかけてくるようだ。私設文部省と言わしめた講談社の野間清治今、私達に何を語りかけようとするだろうか。

昨今の少年の何ともやり切れない事件に学校も、地域社会も社会も適切に対応する能力を失っていると言える。社会全体が狂い始め、その留まることを忘れてしまったようだ。二十一世紀に入るまで、本当に「二十一世紀は心の時代だ」と言ってきた我々は一体何処に行ったのだろうか。

バブルが弾け、長期の経済低迷に陥り、その出口が一向に見えてこない。グローバリゼイションはリストラを生み、大企業は存続を御旗に経済至上主義となった。又、国も地方も財政の危機がその解決の方向を経済問題としてのみとらえている寂しい現状だ。そして、一方では人類の無為無策のために静かに、確実に地球は温暖化への破滅の道を歩んでいる。しかし、どれ一つとっても、問題が大きくて、簡単には解決しない課題ばかりだ。自分ひとりで一体何が出来るかと言う無力感に襲われ、変にそれに納得している世相。なにをやっても無駄、結局行き着くところまで行くほかないと諦めて何もしないか、見て見ぬふりをして、日々の生活に埋没してしまっているのが現状だ。しかし、不可能のように見える課題であるが、部分である一人一人の努力が全体を、地球を変えて行くことが出来るはずだ。「少年に夢を」と強い、燃える情熱で、幼少年時代の教育に出版を通して真剣に取り組んだ野間清治から大いに学ばなければならない。野間清治顕彰会が「将来の子供たちのために」、様々な人々と、団体と共鳴し合って、解決困難な課題に取り組んで行ければと期待したい。世界を変える力、桐生の街にはそんな夢のような力があると信じたい。顕彰碑建立五周年にあたっての文化講演会、展示会等の準備を講談社の絶大な協力を頂きながら進めている。「少年の夢」のために。

郷土への熱き思い

―楢橋國武さんを偲んで―

桐生市教育委員会
前教育委員長　久保田洋子

平成十一年六月二日、東京から二人のお客様をお迎えして、梅田の清風園で会合が持たれました。桐生川の清水が貫流する山奥にある宿。人知れずひっそりと咲く山吹の花に心が和みました。桐生側の出席者は、市内在住の野間家ゆかりの方々で、野間品子さん、野間静子さん、野間信子さん、の三名に、岡田一男事務局長。お客様は、講談社社友会副会長の楢橋國武さんと副事務局長の新井喜久さんでした。楢橋さんは桐生市梅田のご出身であり、野間清治顕彰会に献身的なご尽力をいただいておりました。

講談社と社友会（講談社退職者四〇〇余名の団体）に働きかけ、顕彰会の育成に物心ともにご支援をいただいたのです。それは楢橋さんの強い希望でありました。野間家の方々との対談は、和やかなうちにも実に有意義なものでありました。もう一人のお客様の新井善久さんは私とは小・中学校で共に学んだ、お幼なじみというご縁もあって、この日同席させていただきました。鮎づくしのお料理を賞味しながら話題は尽きず、好奇心旺盛のお二人のエネルギッシュな、そして人間としてのあたたかさに触れながら、顕彰会の発展や、読書推進運動の拡大の必要性などを伺いました。温厚で上品な雰囲気を持ち、正義のためには一歩もゆずるまいとするきびしい面差しに、深く心を打たれたのです。又、親しみ深いあのお声、銀髪にベレー帽姿、やさしさあふれる笑顔が今でも鮮烈に思い出されます。

すでにこのときより一年前には、社友会皆様や顕彰会会員の努力によって「野間清治顕彰碑」が、桐生市立図書館前に建立されました。竣にあたられる、当時九四才の野間定子さんとの力強い握手を今、懐かしく思い出しています。他数々のイベントや高名作家達の講演会が次々に開催されました。顕彰会の大恩人ともいうべき、その楢橋さんが急逝されたとの訃報を受けた時の驚き、そして哀しみは未だに信じられない思いがいたします。平成一四年八月五日、心不全にて他界、享年八一才でした。まだまだご指導をいただきたいところ、誠に残念でなりません。講談社や出版界に残されました。業績は偉大なものがあり、加えて高名な歌人でもありました。戦後の出版界のリーダーとしてのご活躍等、かえすがえすも偉大なる指導者を失った思いで残念でなりません。

これからは、野間顕彰会に寄せられた楢橋さんの情熱に報いるためにも、顕彰会会員の増員をはじめ、読書推進を桐生市の市民運動として定着させ、子どもたちの未来に輝く読書文化の進展に役立てるよう、その重大さをひしひしと感じるこの頃です。

ありし日の楢橋國武さんと野間定子さん